

2019 年度 第 1 回 地域連携による活力ある高校づくり推進協議会 議事要旨

日 時	令和元年 5 月 2 7 日 (月) 1 3 : 3 0 ~ 1 5 : 5 0
場 所	吉城高等学校 会議室
出席者 (敬称略、 50 音順)	石原 典子 民生委員 岩崎 道夫 卒業生の保護者 (前育友会長) 岡山 正喜 アルプス薬品工業 (株) 総務担当取締役 沖畑 康子 飛騨市教育委員会教育長 川上 佳洋 宇宙まるごと創生塾 飛騨アカデミー理事長 坂本 頼彦 吉城高等学校育友会長 関口 祐太 株式会社 Edo 代表取締役 キャリア教育コーディネーター 都竹 淳也 飛騨市長 布俣 正也 岐阜県議会議員 前川 隆子 地域代表 松場 慎吾 HIDAIYO 旅ジョブ 代表 三橋 浩之 国府中学校長 向川原眞郷 古川中学校長 柳 憲嗣 飛騨古川青年会議所理事長 渡邊 正憲 (株) 飛騨ダイカスト代表取締役 (学校関係者) 日江井孝浩 吉城高等学校 校長 大野 貴司 同 教頭 日野 利明 同 事務長 小原 誠 同 教務主任 下嶋 和長 同 生徒指導主事 小澤 耕 同 進路指導主事 (県教育委員会) 平野 孝之 教育総務課 課長
議事概要	1 授業参観 (13 : 45 ~ 14 : 15) 2 授業の感想・意見 ・自分が高校生に戻ったかのような感じで見させていただいた。自分たちの高校時代の授業と比べると、いろいろな工夫がなされている。英語は特にそう感じた。お互いにコミュニケーションを取らせたり、気づきを与えたりするような部分が多く、随分変わってきていると感じた。少人数での授業が行われているが、このくらいの人数で教育が受けられることは幸せであると感じた。一人一人に目が届いているという実感がある。少人数授業のきめ細かさを垣間見させていただいた。 ・吉城高校の生徒は、集中力が研ぎ澄まされていると感じた。また、先生方が上手く生徒の興味関心を引き出す授業展開をされている。授業に魅力を感じ、楽しく見学させていただいた。 ・本日の授業に参観し、中学校では、どうしてもインプットする場面が多いと感じた。子どもたちが学んだことを使って「何をするか」に繋がられるかが課題だと感じた。 ・授業が少人数で、私たちの時代と比べると授業中に寝ていられないと感じた。少人数での授業は、かなり能力が上がるのではないかと思った。I C T を使った授業も見学したが、照明が当たっても見やすいと感じた。 ・私の会社では海外の方を受け入れる宿などの仕事をしている。英語の授業はすべて英語で行われており、授業が進化していると思った。生徒もまじめそうな生徒が多

かった。もっと個性的な生徒もいたら面白いだろう。

- ・吉城高校でコーディネーターをして3年が経つ。学校の学びがモデルチェンジしていく中での「困り」、例えば、どのように地域と連携したらよいか、どうやって学びを作っていくたらよいかということが、吉城高校だけではなく全国津々浦々たくさん「困り」があることを学んだ。そして、そういった問題に関わり貢献したいと考え、4月に3人で会社を作り、現在代表をさせていただいている。これからも吉城高校の学びに全力で取り組んでいく。
- ・授業を見させていただき、私が在学していた頃とは全く違うなと感じた。私の時代は、先生にあてられて自分の意見を言えなければそれで済みだったが、今は「分からなければ隣の人と相談しながら自分の意見を導く」という姿が見られ、大変感心した。電子黒板については、生徒が黒板に答えを書きに行くような場面ではどのような対応になるのか、ふと疑問がわいた。
- ・見学者がいたので、生徒も緊張していたと思うが、もう少し元気のある子がいても楽しいかなと思った。電子黒板については、どのように使うのか使い方に疑問を持った。
- ・授業を見させていただき、いろいろな工夫がされていると感じた。英語の授業では、先生がすべて英語で教えている姿をみて大変素晴らしいと思った。生徒が積極的に英語を話してコミュニケーションが取れるようになれば良い。電子黒板については、写真や動画を用いることで生徒がイメージしやすくなるので、素晴らしいものだと感じた。クラス掲示を見させていただき、SDGs（持続可能な開発目標）に取り組んでいることが分かった。ユネスコスクールに登録されていることも伺った。私たち青年会議所としても、SDGsの17の目標に取り組んでいきたいと考えているので、高校生が働くまでのところで協力していけたらと思った。
- ・一生懸命授業に取り組んでいる姿が良かった。電子黒板があるのに、地図を開きなさいと先生が指示をしていたが、電子黒板で示せば良いのではと感じた。また、タブレットを生徒が使用できれば良いとも感じた。
- ・自分たちの高校生の頃とは随分違っていると実感した。
- ・授業を見学し、先生と生徒の関係が柔らかく良い感じを受けた。しかし、他と異なる考えを発言したり、行動を起こしたりできる生徒を育てることも必要だと考える。小中高が連携し、未来を切り開くたくましい生徒を育てたいと考えている。
- ・見学をした授業の中に、大変活発なクラスがあり、大変印象に残っている。生徒と先生、生徒同士のやり取りがあり、コミュニケーションが活発にできている授業は印象に残るし、生徒のやる気も感じられた。あのような吉城高校らしい活発な生徒が多く育つように教育を進めてほしいと感じた。ずっと話を聞いているだけの授業ではつまらない。良い意味で、やかましいくらいの授業を目指してほしい。

3 資料説明

- ・学校経営の重点について昨年と違うのは、今年度から昨年度までの学校評議委員に替わって、学校運営協議会委員が入ったことである。地域連携による活力ある高校づくり推進協議会は今年度3年目を迎える。従って、今年度から、学校と、学校運営協議会、地域連携による活力ある高校づくり協議会で学校運営を行っていくことになる。そして、岐阜県第三次教育ビジョンの中にある「ふるさと教育の充実」と飛騨市による「飛騨市学園構想」への参画により、課題解決に取り組む学習を推進することである。

教科指導の重点では、少人数教育の充実を推進している。岐阜県で数校が30人学級定員の募集となっている。教室に十分なスペースもある。それは本校の利点である。ICT教育については、県の方針で普通教室すべての黒板がホワイトボードになる。また、電子黒板も2月までに全教室に設置される予定である。今年度は教員がどう使うか一年かけて研究し、来年度から本格的な運用となる。ICT利用のメリットは教員が教材を共有できることである。県下どの学校の教材も共有でき得る。

タブレットについては、まだ全ての生徒が持つことにはならないので、何人かに一台となるが、調べもの等がしやすくなる。

生徒指導の重点、進路指導の重点は昨年度と大きく変わっていない。

特別活動の重点では、生徒が熱意を持って行事に取り組む態度を育むために、生徒が自ら文化祭などの行事を運営するように、教員が支援するよう変えた。本校の生徒は、まじめでおとなしく、言われたことはできるが、少しでも自ら企画し運営できるようにしたい。

キャリア教育については、文科省プログラムの「実社会との接点を重視した課題解決型学習プログラム」を行っており、本年度2年目である。YCKプロジェクトを通して生徒の課題解決能力を高めていきたい。

資料1 学校運営

資料2 学校経営計画

吉城高校版マニフェスト

資料3 入学生カリキュラム（普通科）

〃（理数科）

資料4 活力ある高校づくり推進事業実施計画

資料5 YCKプロジェクト パンフレット

資料6 理数教育フラッグシップ実施計画書

〃 積算内訳書

資料7 県立高校の活性化に関する検討まとめ

資料8 岐阜県教育のすがた

資料9 生徒心得

4 意見交換

- ・今回は地域連携による活力ある高校づくり推進協議会と学校運営協議会の初めての同時開催となる。県の教育振興基本計画（第3次岐阜県教育ビジョン）の基本方針である持続力、共生力、自己表現力といった3本柱を育てていくことをサポートすることが両協議会の役割だと感じている。特に学校運営協議会は、学校運営について意見を述べるができる大切な協議会である。県立高等学校は63校あるが、どの高校でも子どもたちのために環境作りをしている。その中でも吉城高校は先生方の知恵と工夫を凝らして、今まで以上の学校環境を整えていただきたい。本協議会では活発な協議をしていただき、吉城高校がさらに活性化できたらよい。

- ・1年次生が2年次の選択科目を検討する時間はどの時間で行うのか。

⇒総合的な探究の時間で行っている。担任をはじめ多くの教員が話をしながら進めるが、業者による進路適性検査も実施し、文理選択、科目選択について生徒に考えさせている。総合的な探究の時間は1単位である。

- ・地域課題探究の中身を教えてほしい。

⇒課外活動として行っていた「YCKリーダー活動（地域課題解決型キャリア教育である『吉高地域キラメキ（YCK）プロジェクト』のリーダー活動）」を、今年度から学校設定科目の1単位の授業として実施している。台湾研修についても、今年度から「国際理解探究」とし、1単位の授業としている。両科目とも自由選択科目として全学年に設定している。

- ・昨今の求人について、飛騨地区の求人倍率は上がってきているのに対して、中京方面は減ってきている。それによる影響を教えてください。もう一点は、進学でも就職でも卒業後のミスマッチによる相談やケアはどのように行っているか。

⇒求人数は昨年度600件以上あった。就職希望者は20名くらいであったため、求人倍率は30倍以上となった。しかし、ミスマッチは少なからずあると考える。それをできる限り最小限にとどめるため、教員は生徒と綿密に話をしながら本人の適性を考え、複数の企業を見学させるなど、丁寧な就職指導を心掛けている。

	・地区外に出た生徒が辞めたいと言ってきた場合に、何らかのアフターケアまでであると生徒には心強いと思う。 ・国公立大学の推薦入試合格者は13人中5人ということであったが、私立はどのような状況か。 ⇒私立大学は、合格者68名のうち、推薦・AO入試で20名が合格している。短大に関しては推薦入試がほとんどである。 ・市としては、飛騨市の保小中高、特別支援学校を「ひとつの学園」と捉え、系統性、連続性のある一貫した教育活動を実現するために飛騨市学園構想に取り組んでいる。吉城高校のYCKプロジェクト（地域をフィールドとした課題解決型学習）にみられるように、幅広い地域住民の参画を得て、地域全体で子どもたちの学びや成長を支えられるように学校運営協議会を整備し、地域学校協働活動をより活発にしていきたい。 ・今の時代にどういう人材が求められているのかが共有されれば、あとは保育園ではこんなことができる、小学校ではこんなことができるという提案になる。子どもが社会に出た時に身につけておくべき力から保育園では何ができるかという考え方は意外とできていない。高校はその連続性の中でどうあるべきかという議論をしなければならない。 ・飛騨市学園構想は、大きな夢に向かって進んでいる。学校・地域・生徒・保護者及びそれらを取り巻く環境が一つになって、相互理解をしながら進めていかなければならないのではないかと期待する。また、カリキュラムについては複雑になっている。保護者への理解をどう求めていくかが今後の課題であるとともに、中学校においては高校につなげるために、中学校の時点から生徒に進路についてより細かく考えさせることも必要だろう。併せて保護者が理解するステージも設けてほしい。ぜひ、皆さんが一つになって取り組んでいただきたい。 (県教育委員会) ・これまで話題に出てきたICTを活用した授業は、生徒が主体的に考え、生徒と先生、生徒同士が議論しながら深い学びをしていく手助けとなる。深い学びをするために、タブレットなどを活用して自分の意見を発表することができる。同時に、これをどう使うかが課題となる。 ・吉城高校は地域に支えていただいていることが深く理解できた。今年度、県教育委員会では、第3次教育ビジョンにふるさと教育を掲げ、小中高一貫して取り組んでいくこととした。その中では、地域課題解決型学習も進めていく。吉城高校はYCKプロジェクトを通して既にこういった学習を実施しているが、「小中高を通した共通した将来の設定作り」を、各校・各校種でどのように行うのかといった課題がある。 (学校長) ・岐阜県は現在第3次教育ビジョンを掲げ、ふるさと教育の充実とICT環境の整備に取り組んでいる。ふるさと教育については、本校は地域の皆様の御協力のもと、YCKプロジェクトとしてすでに取り組んでいる。ICT環境も順次整う予定であり、エアコン設置工事も現在進んでおり6月には完了する。 ・十分御意見をいただいた。協議会はこの後も開催されるが、何か気が付かれたことがあれば学校まで意見をいただきたい。
--	--